

東洋大学学術情報リポジトリ Toyo University Repository for Academic Resources

## 翻訳 ジョン・ヘンリー・ニューマン「自己目的としての知識」

著者	Newman John Henry, 田中 秀人
著者別名	Tanaka Hideto
雑誌名	経済論集
巻	30
号	2
ページ	151-166
発行年	2005-03
URL	<a href="http://id.nii.ac.jp/1060/00005348/">http://id.nii.ac.jp/1060/00005348/</a>

〔 翻 訳 〕

## ジョン・ヘンリー・ニューマン 「自己目的としての知識」

田中秀人訳

「大学」は「学生」との関係からも、「研究分野」との関係からも考えられるものです。そして、すべての「知識」が一つの統一体で、個々の「<sup>サイエンス</sup>学問」分野がその一部であるという、これまで私が研究のために用いてきた原則〔原著第一部第一、二、三、四章の連続講演〕は、学生に注意を向ける場合にも等しく重要です。さて、これより学生の方に目を向け、この原則によって「大学」が学生に授ける教育というものを考えてみたいと思います。そうすることによって、皆さん、私が検討しようとしていた問題、すなわち、大学の授業が、教えられる側との関連においてみた場合、果たして「効用」を持つものかどうか、そしていかなる意味においてそうなのかという問題に入っていくことになるでしょう。

1

これまでの講演で申し上げたように、知識のあらゆる部門は互いに関連し合っています。何故なら、知識の内容は「創造主」の御業だからであり、それ自体緊密に統一されているからです。私たちの知識が分類されると申してもよい諸々の「学問」が相互の関係と内的調和を増大させ、さらに比較や調整を許す、というよりむしろ促すのは、このためです。諸学は相互を完成させ、矯正し、均衡を保ち合うのです。こうした考え方がもし十分に根拠のあるものだとしたら、諸学の共通の目的たる真理への到達という観点からのみならず、それらの学問を学ぶことがその教育となる人々への影響という点からもまた、考慮されなければなりません。すでに申しました通り、あるものを不当に優遇することは他に対して公正を欠くことになりまして、またあるものを無視したり破棄することは、他のものをその本来の目的から逸脱させてしまうことになってしまいます。それは学問と学問の境界線を揺るがし、その活動を妨げ、諸学を結び合わせている調和を破壊することです。そのようなことが教育の場に持ち込まれれば、それに相応した結果が生じるでしょう。学問は、一つの統一体の一部と見なす場合と、他の学問の（言うなれば）保護もなく、それ自体を切り離して考えてみた場合とでは、全く異なった様相を呈するからです。

一例を挙げてみましょう。色彩を配合する際、色の選択と並べ方の違いによって全く異なった効果が生まれます。赤と緑と白は、置かれたときの対照<sup>コントラスト</sup>によって色合いが変化します。同様に、知識の一部門の趣旨や意味は、それが何と一緒に学生に紹介されるかによって変化します。その学生の読書がただ一つの科目にのみ限定されているとしたら、そのような分業がある特定の研究の進歩にいかに関与しようとも（この点についてはここでは立ち入りません）、それは確実にその学生の精神を萎縮させることになるでしょう。もしその科目が他と合体していれば、それが学生に及ぼす影響については、他の科目次第ということになります。ですから、「古典」はイギリスでは趣味を洗練する手段となっていますが、フランスでは革命的かつ理神論的教義の普及に貢献してきたのです。「形而上学」においてもまた、バトラーの『宗教の類比』<sup>アナロジー</sup>はオクスフォード大学でこそ人々のカトリック改宗に大いに役立ちましたが、別種の教育を受けてきたピットや他の人々には、不信心の方向にのみ影響を及ぼすようにみえたのです。そしてまた同様に、ランダフ<sup>ビショップ</sup>の主教ウォトソンは（自伝中でそう語っているように私は思うのですが）、「数学」という学問が人の心を信仰から遠ざけると考えましたが、一方でこの数学の研究こそが「キリスト教の神秘」に最もよく似ており、したがって、その最もよい防壁になると考える人々が数多くいます。同じように、アルケシラスはアリストテレスのように論理を操りはしなかったでしょうし、アリストテレスはプラトンのように詩人を批判したりしなかったと私は考えますが、しかし推論も詩も学問の法則に従うのです。

ですから、「大学」で教える学問の範囲を拡げることが学生のためにも重要になってきます。また、開講科目全部を履修することは出来なくとも、学生たちは学問の全領域を代表する人々の間で、その指導を受けて暮らすことによって何かを得るでしょう。このことが、教育の場として考えた場合の、普遍的な学問の府の利点であると私は考えます。専門の学問に熱意を燃やす、ライバル同士の学者の集団が、親密な交わりによって、また知的平和を求めて、各自の研究主題の主張と関係を調整するよう招き寄せられているのです。彼らは互いに尊敬し合い、意見を聞き合い、助け合うようになります。こうして純粹で澄みわたった思索の雰囲気<sup>ユニヴァーサル</sup>が創り出され、学生もそれを吸い込むのです。もっとも学生は数ある学問のなかからほんの少ししか履修しません。学生は一つの知的伝統の恩恵を受けますが、その伝統（それは個々の教師とは無関係なものです）が、学生の科目選択を指導してくれたり、選択した科目を適切に説明してくれるのです。学生は知識の大いなる輪郭を、知識の基本原則を、知識の各部門の規模を、その光と影を、その重要な個所とそうでない個所とを理解するのですが、こうしたものは別の方法では理解できないものなのです。これこそが学生の教育が「リベラル」と呼ばれる理由です。一生涯続く精神の習性が形成されますが、その属性は自由、公平、冷静、穩健、叡智であり、以前〔講演三「神学と他の学問との関係」、原著 57 ページ〕私が哲学的習性と敢えて呼んだものでもあります。そこでこれを私は、

他の教育の場あるいは教育方法と対比してみて、「大学」で授けられる教育の特別の成果にしたいと思えます。学生の取り扱いという面からみた場合、このことが「大学」の主な目的となります。

さてここで、私に対して質問が寄せられましょう、その効用とは何か、と。その質問に対する私の答えが、これからお話ししようとしているいくつかの「講演」の主題です。

2

慎重かつ実際的にものごとをお考えになる方々は、私にお訊ねになるでしょう。結局、私がこうまで重視し期待する、この「哲学」の利益は何なのか、と。たとえその哲学によって私たちが、それぞれの学問に対してまさにふさわしい義務を果たすことができ、どこで見出されるにせよ、あらゆる真理の価値を正確に評価することができるとしても、私が賞揚するものごとのこの基本原理がどれほど人を利するのでしょうか？ それは分業の原則を覆しはしないのでしょうか？ それを修めることによって、実際的な目的はよりよく達成されるのでしょうか？ あるいはその逆でしょうか？ それはどこへ導くのでしょうか？ どこで終るのでしょうか？ 何を為すのでしょうか？ どのような役に立つのでしょうか？ 何を約束するのでしょうか？ 個々の学問はそれぞれ一定の技術アーツの基礎であり、ある主題についてすでに知識を獲得したなら、その真理を明白で有益な結果へと導くものなのです。では、この諸学の学〔哲学〕が標榜する「技術」とは何でしょうか？ そのような「哲学」の成果は何でしょうか？ 「大学」創設という企てに着手するにあたり、私たちは何をもちたそうとし、カトリック社会にどのような刺激を与えるのでしょうか？

「大学教育」の目的は何か、また大学が授けると私が考えている「人文・教養リベラル的すなわち哲学的な知識」の目的は何か、と私は問われています。私はこうお答えします。大学教育には一つの明確な、現実的な、そして十分な目的があるということ（その目的はただいま述べた知識それ自体から切り離すことはできません）は、私がすでにお話してきたことが十分に示しています、と。「知識」というものはそれ自体の目的たり得るのです。人間の精神は、いかなる種類の知識といえども、それが真の知識である限り、それ自体の報いとなるように作られているのです。そしてこのことがすべての知識にあてはまるとすれば、それはかの別格の「哲学」にも真実であり、その哲学が知識のあらゆる部門の真理、学問と学問の関係、その相互の立場、それぞれの価値を包括的にとらえていると私は考えます。そのような知識習得に、私たちの求める他の諸目的、つまり富とか権力とか名誉とか便利で快適な生活と比べて、どのような価値があるかについてはここで論じるつもりはありません。しかし、次のことは主張したいし、また明らかにするつもりです。このリベラルな、哲学的知識は本質において真に紛れもなく立派な目的であって、それを獲得するための多くの思索とそれを達成するための多くの労苦を埋め合わせるのです。

さて、「知識」はそれを超えた何ものかに至るための手段であるとか、あるいは単にそれが当然

技術に変容していくその準備段階であるだけでなく、それ自体のために存在し追及するに足る目的でもあるのだと申しまして、決して逆説を弄しているわけではありません。というのも、私の述べていることは、それ自体明瞭であると同時に哲学者の共通の意見であり、人類に共通した感情でもあるからです。近年「宗教」に反対する、滑稽で、奇異で、多彩な知識を耳にすることがいかに多いかを考えると、今日の世論が少なくとも性急に否定すべきではないことを申し上げているのです。私はただ、すべての書物がその例証に向けて書かれてきたことを言っているにすぎません。すなわち、「古今東西の『哲学』『文学』『美術』の記録から一群の実例を選び出してみると、いかに不運な環境であろうとも、知識の習得に対する熱烈な欲求を抑えることができなかつたということが明らかになる」<sup>1)</sup>のです。知識を所有することで、知識それ自体を超えた利益が私たちに与えられ、他人に資するというのを否定する気など私には毛頭ありません。ですが、これらのことを抜きにしても、知識の獲得そのものによって私たちは本性の直接的要求を満たしているのです。そして、私たちの本性は、私たちより劣った動物のそれとは違って、直ちに完成するのではなく、その完成のために多くの外からの助けや手段に依存しています。「知識」は、そのうちの主要なものの一つとして、それが私たちのうちに存在するというまさにそのことが一つの習性となって役立つがゆえに、貴重なのです。たとえ、それ以上利用されもせず、何ら直接的目的に役立つことがなくとも。

### 3

キケロが様々な精神的卓越の項目を列挙する際、「知識」の追求を第一に置いた理由もここにあります。「このことはとりわけ人間の本性に関係している」と彼は述べています。「というのは、我々は皆、知識の追求に引かれるからである。それに秀でることを我々は優れたことと考える。それに対し、誤解したり、間違ったり、知らなかったり、騙されたりすることは災いであり、恥辱である」<sup>2)</sup>そしてキケロは「知識」を私たちが肉体的欲求を満たした後に先ず最初に引きつけられる対象と見なしています。自分自身や家族、隣人に関する私たちの動物的存在の必要や義務（そう呼ぶことができるかと思えます）の後に続くのは、キケロ言うところの「真理の探究である。従って、我々は避けがたい務めや心配ごとの重圧から開放されるやいなや直ちに、聞き、知ろうとする。そして隠されていること、あるいは不可思議なことを知ることを幸福の一つの条件と見なすのである。」(1・4・13)

この一節は数多くの作家によく見られる類似の文章の一例にすぎませんが、私はそれがよく知られているというまさにその理由で引用しました。ところで、皆さん、注意していただきたいのは、「知識」の追求と知識が間違いなく、さらにその奥の目的へと導くとされるその隠れた目的（それはまた私に「大学教育」や「人文・<sup>リベラル</sup>教養教育」の効用とかを訊ねるときに人々が専ら考えて

いると思われる目的でもあるのですが)とをこの一節がいかに明確に区別しているかということです。「知識」の修養ということを主に肉体的な安逸や享楽のため、人生や人格、健康、夫婦や家族の和合のため、社会の絆、市民の安全といった目的と直接結びつけて考えるのとは全くちがって、この大「雄弁家」は、私たちの肉体的、政治的な要求が満たされてはじめて、そして「必須の義務や心配ごとから解放され」た時に、私たちは「見たり聞いたり学んだりしたいと欲する」状態に置かれるのだとほのめかしています。キケロはいったん獲得された「知識」がこうした物質的なものに反映したり、それに作用を及ぼすなどとは少しも考えませんが、知識を探し求めないうちは、私たちはこのような物質的なものを手に入れようとするものです。それどころか、ペーコン哲学以降の時代に生きる私たちには奇異に思えることですが、キケロは知識の社会生活に対する関係をきっぱりと否定し去り、同胞に対する義務に抵触するような知識の修養を戒めています。彼はこう言っています。「すべてこれらの方法は真理の探究にかかわる。真理を追求するあまり、公務をなおざりにするなどは義務に対する違反である。何故なら美徳が賞賛されるのはすべて行動によるからである。しかしながら、行動が中断されることがしばしばある。が、やがて我々は再び真理の追求へ戻っていく。精神の絶え間ない活動は澆刺としていて、我々が自ら努力しなくても知識の追求へといざなってくれると言ってもいいくらいだ。」(1・6・19)「学問や知識の追求」によって社会に貢献するという考えは、キケロがそれらの修養の動機として列挙する項目の中には入っていません。

大カトーが同国人たちに「ギリシア哲学」を紹介することに反対した根拠はここにありました(ちょうどその頃カルネアデスと彼の一行が、外交上の使命を帯びてローマを訪れ、ギリシア哲学を雄弁に説いてローマの若者たちを魅了していました)。実際的な国民の代表者として誰よりも適任であったカトーは、万事を結果で評価しました。ところが、「知識の追求」は「知識」そのもの以上には何もかも約束しません。彼は自分が経験したことのない精神の洗練とか拡大とかいうことを軽蔑したわけです。

#### 4

他のすべてのものから切り離されていながらもなお生き続けることのできるものは、それ自体のうちに生命をもっていなければなりません。何の成果ももたらさないのに長い間その地歩を維持し、有益であると未だ証明されないのに賞賛に値すると見なされている営みは、どのようなものになるうとも、それ自体のうちに十分な目的を持っているに相違ありません。私たちも、今検討中の知識を指してひろく使われている形容句の意味を考えてみると同じ結論に到達します。「大学」や、紳士のきわだった特徴ないし属性として、「自由人にふさわしい(リベラルな)知識」とか「リベラルな学芸〔<sup>アーツ</sup>教養科目〕、研究」、「リベラルな教育」とか普通言われますが、この言葉が

真に意味するものは何でしょうか？ 先ず第一に、その語義からすると、それは「<sup>サーヴァイル</sup>奴隷的な」という語の反対です。「奴隷的な仕事」とは、教義問答が教えるように、肉体労働とか機械的な仕事などのことであり、それには精神がほとんど、あるいは全くといっていいほど関与しません。そのような奴隷的な仕事に似たものとして、かの詩人のいう<sup>3)</sup>、起源と方法とを技量ではなく偶然に負っている技術（その名に値するとして） 例えば、やぶ医者の診断、手術 があります。この〔リベラルとサーヴァイルという〕対照がその言葉の意味を引き出すと考えれば、リベラルな教育およびリベラルな営みとは、精神、理性、内省を働かせることということになります。

しかし、もう少し説明する必要があります。と申しますのも、肉体の働きにもリベラルなものがありますし、精神の働きでそうでないものがあるからです。例えば、古代では開業医はふつう奴隷でした。けれども、そのみせかけ、いんちき、いかさま治療で今日同様墮落していたかもしれませんが、その本質においてそれは知的な技術でした。その目的において神聖であったように。同様に、私たちはリベラルな教育を商業教育ないし職業教育プロフェッショナルと対比しますが、商業や専門職が最高かつ最も変化に富んだ精神力の働く場を与えるということを何びとも否定できません。そうすると、厳密には「リベラル」と呼べない実に様々な知性の働きがあることになります。一方で、肉体の働きの中にその名称を受けるものが出てきます。例えば、古代における体育パレストラがそれであり、オリンピック競技のように精神と肉体双方の力と敏捷性が賞を獲得するものもありました。クセノフォンのなかに、ペルシアの若い貴族が乗馬と真実を語る術とを教えられたと書かれています。『アナバシス』1・9・3-7）が、この二つは共に紳士たる者のたしなみに数えられていました。戦もまた荒々しい職業ではありますが、リベラルなものとなされてきました。もっとも、英雄的になる場合は除かれます。そうすると、また別の問題となるからです。

さて、現在私が検討している語〔リベラル〕を適用するとき、明らかに色々な差が生じてきますが、こうした事例を比べ合わせてみると、その原則を決定することは、少しも困難ではありません。男性的な競技、技量を競い合う競技、あるいは武勇といったものは肉体的ではありますが、リベラルと考えられているようです。逆に、単に職業的でしかないものは、いかに高度に知的であっても、それどころか商いと手仕事と比較していかにリベラルであろうとも、単純にリベラルと呼ぶことはできないのでありまして、商業など全くリベラルと無縁のものです。何故、このような区別がなされるのでしょうか？ そのわけは、リベラルな知識が私たちの観想のふさわしい対象であるためには、それ自体の要求に基づき、結果に左右されず、補足を一切期待せず、いかなる目的によっても（いわば）鼓吹カウチされることを、すなわち何らかの技術に吸収されることを拒む そのようなものだけがリベラルな知識に値するからです。どんなに平凡な仕事でも、それが自足して完全であれば、この特性をもっているのであり、一方、どんなに高尚な仕事でも何かそれを超えたものに仕えていれば、それを失うのです。価値や重要性の点で、整骨に関する論文と、

クリケットや狐狩りとを秤にかけることはばかげたことですが、しかしこの二者のうちでは肉体的働きの方が私たちのいう「リベラル」な特質を持ち、知的な方はそれを持たないのです。知的職業全般についても、単に職業としてのみ考えるならば、同様です。あるものは庶民に益するところ大でしょうし、別のあるものは政治的に大変重要でしょうし、他の一つはあらゆる人間の営みの中でも最も神に近いものでしょうが、しかし、身体、国家、魂の健康というその目的の偉大さは、まさしく「リベラル」という名称に対する要求を減じこそすれ、増すものではなく、その目的の絶対的要件にまで削られるようであれば、なおさらです。例えば、「神学」を観想のために修めるかわりに、説教に利用するためだけとか、教義問答として言い表わすだけならば、たとえその有用性や神聖さや価値を失うわけではなくとも（むしろ、こうした善意のへりくだりによって、これらの特性を主張できるのです）、私がたゞいま説明している特性を失ってしまうのです。ちょうど涙と断食とによってやつれ果てた顔から美しさが消え失せ、労働者の手から優美さがなくなるように。なんとすれば、このように行使された「神学」は純粋な知識ではなく、むしろ「神学」を利用する一つの技術あるいは事業であるからです。このように、超自然のものでさえリベラルであるとは限らず、英雄が必ずしも紳士であるわけではないことが明らかとなったわけですが、それは一つ一つの観念が別ものだという分かりきった理由によるのです。同様に、「ベーコン哲学」は自然科学を人間に役立つように用いますので、それら諸学を「有用」な研究という別の種類へと変質させてしまいます。また、別の例を挙げれば、ここでも明らかに、個人的な利益を動機とする場合は、必ずそれぞれの営みの性質に一層顕著な影響が現われます。かくしてギリシアにおいてはリベラルな修練であった競馬は、昨今のように賭博ギャンブルの機会とされる限りは、その地位を失うのです。

私がこれまで申し上げてきたことはすべて、かの「大哲学者」のいかにも彼らしい言葉に要約されます。彼はこう言っています。「財産については何よりも、実りのあるものは役に立ち、自由人にふさわしいものとは、楽しむことが目的であるようなものである。実りがあるとは、収益をもたらすものことであり、楽しむことが目的であるとは、それを用いること以外何ものも結果としてもたらさないものことである。」<sup>4)</sup>

5

このように古の人々に訴えたからといって、私が世界を二千年逆戻りさせ、「哲学」を異教の論理でがんじがらめにしているなどと想像なさらないで下さい。世界が続く限り、これらの問題に関するアリストテレスの教義は生き続けるでしょう。何故なら、彼は自然と真理との神託だからです。人間である限り、私たちは大いにアリストテレス信奉者たらざるを得ないのです。何故なら、この偉大なる「師」は他ならぬ人類の思考、感情、見解、意見を分析するからです。彼は私

たちが生まれる前に、私たちの言葉や思想の意味を語っていたのです。幾多の問題において、正しく考えるということは、アリストテレスのように考えることです。好むと好まざるとにかかわらず、私たちはアリストテレスの弟子なのですが、それに気がつかないのです。ところで私たちの眼前の事例についてですが、「リベラル」という言葉は「知識」や「教育」に適用されると、ある特定の観念を表わします（人間の本性が変わらない限り、今までずっとそうでしたし、これからもずっとそうでしょう）。ちょうど、「美」の観念、「崇高」、「滑稽」、「下劣」といった観念が特定のものであるように、それは今も昔も変わらず存在し、信仰の教義の場合と同様、絶えざる歴史的伝統によって例証され、この世に姿を現わして以来一度も消滅したことがありません。どのような営み、どのような技術がこの観念のもとに分類されるかという点について、確かに時として意見の相違が見られることはあったでしょうが、そのような相違はその観念が実在することの証拠をつけ加えるにすぎません。その観念には実質があり、このような論争や変化のさなかにあっても、その地位を守り続け、ものごとを計る基準としての務めを果たし続け、私たちの本性に根ざしていない考えや思想など、いかなるものであれ粉飾したり左右するようなものが多くあっても、この観念は心から心へと変わることなく受け継がれてきたのです。もしそれが単なる帰納法的一般概念であったならば、帰納された事柄と共に変化していたでしょうが、その事柄が時代と共に変化しても、この観念自体は変わらないのです。体育はリュクルゴスにはリベラルな修練と思われ、セネカにはリベラルならざる修練と考えられるでしょう。馬車競技や拳闘試合はギリシアにおいては承認されても、英国ではとがめられるでしょう。音楽はある種の現代人の眼には卑しむべきものかもしれませんが、アリストテレスやプラトンからは最高の地位を与えられています（また、「美」や「善」や「徳」といった観念を適用する場合も同様で、趣味の相違、判断の相違が存在します）。しかしながら、このような差異は原型となる観念がないことではなく、あることを暗示しています。その原型となる観念こそ先行する仮説ないし条件にほかならず、それあればこそ、対立する意見の間で論議が交わされるのであって、それがなければ討論することもなかったでしょう。

ですから、それ自体が目的である「知識」について語り、それをリベラルな知識あるいは紳士の知識と呼び、それを目指す教育を施し、それを「大学」の目的としたところで、逆説を口にしたかどで責められるとも思えません。この習得を漠然とした通常の意味での「知識」ではなく、私が特に「哲学」と呼んでいる「知識」、あるいは広義の「<sup>サイエンス</sup>学問」を指すのだと言え、そのような非難を浴びることはなおさら少なくなるでしょう。というのは、知識をただ漠然とした一般的な意味ではなく、「哲学」として正確に先験的に見るならば、「知識」を利益だと見なす主張はより高い次元で妥当でしょうから。ですから、「知識」はそれが哲学的である時、またそうである限り、あらゆる付帯的な、隠された目的は別にして、とりわけリベラルなものであって、自己充足

的なものであると私は考えます。このことをこれから引き続いてご説明したいと思います。

6

さて皆さん、私がこれからお話しようとしていることが一見して絵空事のようにみえても、辛抱してお聞きください。「哲学あるいは学問」と「知識」との関係は次のようになっています。「知識」は、「理性」に働きかけられ、鼓舞され、あるいは（大げさな表現を用いるなら）受胎しますと、「学問」とか「哲学」という名で呼ばれます。「理性」は「知識」の本質的豊饒の本源であり、それを有する人々にとっては格別の価値であり、彼らがそれ以外に頼るべき目的を捜し回る手間を省いてくれます。実際、「知識」はこのように一つの学問的形態にまで高められると、力ともなり、単にそれ自体が卓越しているにとどまらず、いかなる卓越性であれ、何かそれ以上のものとなって、それを超えた結果を生ずるものです。このことは疑問の余地なく明らかですが、もっと先で考慮すべき問題ですので、ここでは論じないことにします。ただこう申し上げておきます。知識は力である前に利益であると、つまり、単に手段であるのみならず目的でもある、と。知識は技術に妥容し、機械的過程に、形のあるものになり得るということを私はよく承知していますが、知識はまたそれを鼓吹する「理性」に依存し、「哲学」へと変じもするのです。それは、前者の場合「有用な知識」と呼ばれ、後者の場合は「リベラルな知識」と呼ばれます。同一人物が知識を同時に両方向に修養することもできましようが、これもここでの問題とは無関係です。ここではただ、「知識」には二つの用い方があるとだけ言っておきます。実際問題、知識を一つの方法で用いる人は、それを他の方法で用いようとはしませんし、少なくともごく限られた程度にしか用いようとしません。ですから、「教育」にも二つの方法があることがお分かりいただけるでしょう。一方の目的は哲学的であり、他方のそれは機械的です。一方は一般概念へと高まり、他方は特殊なもの、外的なものに注がれるのです。有用な、機械的な技術に属する特殊なもの、実際のなものに注意を向ける必要性を私が否定し、その恩恵を非難しているなどとお考えにならないでください。人生はそれなくしては先へ進みません。私たちの日々の幸福はそのおかげです。そのような技術を行使することが多くの人々の義務であり、その義務の履行に対して多くの人々に私たちは恩義があります。私が申し上げたいのはただ、「知識」は特殊になればなるほど「知識」たることを止めてしまうということです。「知識」が厳密な意味において動物に備わっているかどうかは疑問です。形而上的に正確な言い回し（このような場合、不適當なようです）を避けて申し上げれば、動物も持っていると思われる、ものごとの受動的感覚や知覚を、「知識」という名前と呼ぶことは不適切に思われます。「知識」と言う時、私が意味するのは、何かしら知的なもの、五感を通して知覚したものを把握するもの、ものごとについて一つの見方を持ったもの、五感が伝える以上のものを見るもの、見ているときに見ているものに理性を働きかけるもの、それに観

念を付与するものことです。知識はただ単なる宣言という形ではなく、一種の省略三段論法によって表現しますので、最初から学問的な特質を持ち、その威厳もこの点にあるのです。「知識」の真の威厳、価値、望ましさの本源は、その結果を別にすれば、知識に内在する学問的ないし哲学的過程のこの芽にあります。このことが知識がそれ自体一つの目的となる仕組みであり、「リベラル」と呼ばれる理由なのです。事物が相関的に配置されていることを知らないのは、奴隷あるいは子供の状態であり、「宇宙」を精密にするすことは「哲学」の誇り、あるいは少なくとも野心なのです。

その上、そのような知識は単なる付帯的な、偶然の利益ではありません。それは今日は我がもの、明日は他人のものといった、また書物から学ばれ、すぐにまた忘れ去られるといったようなもの、好きなように支配し伝達できるようなもの、臨時に借用し、手に携えて運び回り、売り物に出すといったものではありません。それは獲得された後天的な啓発であり、習性であり、個人の財産であり、内面的な資産なのです。そしてこれが、「大学」を<sup>インストラクション</sup>教授の場というよりも、<sup>エデュケーション</sup>教育の場と呼ぶ方がより普通であり、また正確でもある理由です。もっとも、知識というものが関係してきますと、一見したところ教授という言葉がよりふさわしく思われるかもしれませんが。例えば、私たちは手仕事や美術工芸や商業や各種の実務を教授されます。と申しますのは、これらのものは手段であって、精神そのものにはほとんど、あるいは全くといっていいほど影響を及ぼさず、記憶、伝統、慣行に委ねられる諸規則に含まれており、外的な目的に関係するからです。しかし、教育はより高次の言葉であって、私たちの精神の本性への作用、人格の形成といったことを意味します。それは何か個性的で永続的なもので、ふつう宗教とか徳と関連して語られます。ですから、「知識」の伝達を「教育」と言う時、実はその「知識」とは精神の状態ないし条件であるということの意味します。また精神の陶冶とは確かにそれ自体を目的として追求するに足ることですので、私たちは再び次の結論に辿りつくことになります。つまり、「リベラル」という言葉と「哲学」という言葉がすでに暗示しているように、知識とはそこから何も生まれて来なくとも、望ましいものであり、それ自体財宝として、積年の苦勞に対する充分な報酬として存在するということです。

## 7

ですから、これが、この「講演」を開始した時の質問に対して私が与えようとしている答えです。「教会」が「哲学」を取り上げる目的について、また「哲学」を用いる効用について話を進める前に、私は「哲学」はそれ自体を目的としているということを主張するつもりですが、どうやらすでにそのことを証明し始めているようです。その働きのためばかりでなく、あるがままの姿で所有するに足る知識が存在するというを私は主張するつもりです。そこで、この問題が一

部の人たちには不明瞭かつ混乱したものと映っているかもしれませんが、本日残された時間を、それらの点を少しばかり除去する作業に充てたいと思います。

さて、「知識」が自己目的であるという主張に対して、次のような反論がなされるでしょう。「知識」を何らかの、あるいは何かそれを超えた他の目的のために追求すると私たちが言う場合、それが何であれ、私たちの言い分は理解できる。だが、どんな言い方をしようとも、またその觀念が時代から時代へといかに執拗にその根拠を保ち続けようと、なお「知識」を他の何もののためでもなく、それ自体のために追求するなど言うことは、無意味でしかない。何故なら、それは常に何かそれ以上のものへと導き、従ってそれが今度は目的となり、それが望ましいことの原因となるからだ。その上、この目的は現世であろうが来世であろうが、二重の意味を持っている。すべて知識は世俗的な目的のためか永遠の目的のために修められる。世俗的な目的に向かう場合、それは「有用な知識」と呼ばれ、永遠の目的に向かう場合「宗教的ないしキリスト教的な知識」と呼ばれる。従って（前にも述べましたように）この「リベラルな知識」は、肉体や財産に恩恵を施さないとしても、魂に恩恵を施すはずだ。もしこれが事の真相だとしたら、そのような知識は、一方において物質的にも世俗的にも利益にならず、また他方、道徳的にも利益にならなければ、それは全く利益になどなり得ず、それを獲得するために要した苦勞に値しない、と。

そこで私は、あらゆる時代の「リベラルすなわち哲学的な知識」を公言する人たちが、自らこの問題についてのこのような説明を認識し、それが帰着する結果を甘受してきたことを思い起こしたいと思います。と申しますのは、彼らは常に人間を高潔にしようとしてきたのであり、もし仮にそうでなかったとしても、少なくとも精神の洗練が徳であり、彼ら自身が人類のなかで高德な部類に属すると考えてきたからです。彼らはこのことを公言しながら、一方その公言を全く果たせず、その結果世間の評判となって、謹厳な人々からも道楽者からも物笑いの種とされてしまったのです。こうして、心ならずも人様の手を煩わせることもなく、自分の正体を暴露する根拠と手段とを与えてしまいました。一言で言えば、アテネが世界の「大学」であった時代から、実行の伴わない約束、達成されることのない望み以外、何を「哲学」は教えてきたというのでしょうか？その使徒たちの深遠、高邁なる思想が、雄弁な言葉以外、何をもたらしてきたのでしょうか？否、それどころか、哲学が人間の罪惡の矯正に最も大胆であった時、その教えはいったい何を目論んでいたのでしょうか？あたかも麗しい楽の音が、むしろ強烈な、人を恍惚へと誘い込む芳香が、触れるものごとく先にその甘美な香りをふり注ぎ、ほどなく、人を楽しませたと同様、今度は不快感を与えずにはおかないように、哲学はその教訓で私たちを魅了して眠りへと誘い、何ものをも感じないようにしただけなのではないのでしょうか？「哲学」は気まぐれな民衆の不況をかかったキケロを元気づけ、傲慢な暴君に反抗したセネカを勇気づけたのでしょうか？プルータスがいたましくも告白しているように、彼が最もそれを必要とした時、哲学は彼を見捨てま

したし、カトーを、彼の賞賛者たちが奇妙にも自慢するところによれば、天界に対する公然たる謀反という不本意な立場へと追い込んだのでした。ポレモンのように哲学のために放蕩三昧の生活から回心し、アナクサゴラスのように哲学を手にするために、代償として世界を失ってもよいと考える人々が、哲学を公言する人たちのうちに何人いるのでしょうか？『ラセラス』（サムエル・ジョンソン作、1755年）に登場する哲人は超人の教義を説きましたが、やがて人間的な情愛の試練の前に雑作なく屈服してしまいました。

こう書かれています。「その人は激情の抑制ということを力説した。彼の容貌は神々しく、動作は奥ゆかしく、発音は明瞭で、言葉遣いも優雅であった。彼は強い感情を込めて様々な例を挙げながら、人間のより低い機能がより高い機能を支配すると、人間性は墮落し品位を落とすと説いた。彼は折ふし激情の征服に関する様々な教訓を伝え、大勝利をかち得た人々の幸福を説いたが、こうして勝利をかち得た人はそれ以後もはや恐怖心の奴隷でもなければ、希望を追い求める愚か者でもなくなる。（中略）彼は苦痛にも快樂にも動かされない英雄の例を数多く挙げたが、このような英雄たちは、俗物が善だとか悪だとか名づける様々な習慣や出来事を平然とながめた。」

ラセラスが二、三日して訪ねてみると、哲人はほの暗い部屋にうつろな眼をして、蒼ざめた顔をしていました。哲人はこう言いました。「悪い時にいらっしやいました。今はどのような友情も無駄です。私の苦しみは癒やしようもなく、私の失ったものは取り返しようがないのです。私の娘、私の老後の慰めであった心根の優しい一人娘が昨夜熱病にかかって死んでしまったのです。」王子はこう答えました。「先生、死は賢い人なら決して驚いたりしないことではないのですか。私たちは死が常に身近にあることを、従って覚悟しておかねばならぬことを知っているのではありませんか。」哲人はこう答えました。「若者よ、君の言葉は別れの苦しみを一度も味わったことのない人のものだよ。」ラセラスは言いました。「それでは、先生はあれ程強く主張された教えをお忘れになったのですか。（中略）形あるものは本来移ろいやすく、ただ真理と理性のみが常に不変であると考えよという、あの教えを。」嘆き悲しむ人はこう答えました。「真理や理性がどんな慰めを与え得ましょう？ 娘がもう生き返らないと告げる以外、どんな役に立つのでしょうか。」

## 8

自分にあらざるものをもって人を欺き、自分のあるがままの姿を晒して人を呆れさせるよりも、何も公言しない方がよかろう、ずっとよかろうと皆さんはおっしゃるでしょう。感覚論者や世慣れた人は、どんなことがあっても巧言の犠牲になることはなく、現実を追求しそれを獲得します。「功利主義の哲学」は少なくともその務めを果たしている、皆さんはそうおっしゃるでしょう。私もそれは認めます。その目指すところは低いのですが、その目的を達成してきました。功利主義哲学の「予言者」であったかの偉大な知性の人〔フランシス・ベーコンを指す〕は、実生活で自

身の公言するところに背きましたが、その哲学によって友に忠実であれとか信義にあつくあれとかいう束縛を受けてはいなかったのです。道徳性などということを入々に教えようと企図することは、彼の柄ではありませんでした。また、詩人〔アレクサンダー・ポープを指す。『人間論』〕が名付けたように、彼が人類のうちで「最も下劣な」人間であったとしても、それはいわば個人的な立場においてそうだったのであって、帰納法の理論を何ら侵すものではありません。洞窟や劇場の「偶像」〔ベーコンイドラ『新機軸』ノヴム・オルガヌム〕がいかに反対意見を唱えようとも、そちらを選ぶなら、そうなる権利を彼は持っていたのです。彼の使命は肉体の愉楽と社会の安楽の増進でしたし<sup>5)</sup>、彼は自分の構想と計画を實に見事に成し遂げたのです。彼が植えたあの魔法の「知恵」の木には、ほとんど日毎に新鮮な若芽が生え、蕾が顔を出し、花開き、実を結んでいきます。そしてその木に、きわめて貧しい人々を除いて誰しもがおそらく現在の生活がそうではなくとも、少なくとも日々の糧、健康、公共の安逸といった恩恵を被っているのです。彼は現世の幸福のために神が私たちすべてに遣わされた使いであって、その偉大さのゆえに、人間としてどう考えねばならぬにせよ、私はただひたすらなる感謝の念から、彼を手厳しく語るつもりはありません。また、今日明らかなように、彼の哲学には「神学」を軽んじたり踏みつけたりする傾向がありますが、にもかかわらず、彼自身はその著作の中では、あたかもそのような傾向に予言者の疑念を抱いていたかのように、哲学がかの慈悲深き「父」<sup>6)</sup>なる神の道具であり、地上に姿を現わされた時、「神」はいみじくも自らに人類の肉体の傷を和らげる任務を授けられたとわざわざ主張しているのです。そして実際、物語に登場する年老いたまじない師〔ドイツの詩人フーケの「知られざる患者」中の登場人物〕のように、「その人は仕事に精を出し、楽しそうな顔つきで敬虔な歌を口ずさんだ」のです。そして今度は「牧場へと歌いながら、さも楽しげに出かけていったので、遠くから彼を見かけた人たちは、愛しい人のために花を摘む若者かと思いきすれ、朝露に濡れた葉草を採集する老医師だなどとは到底思わなかった」<sup>7)</sup>のです。

悲しいかな、人間というものは日頃の行ないや心の奥底では、興奮した時や自分の才能に有頂天になって酔いしれている時のように、立派で気高く落ち着いた様子をしておりません。かのベーコンにして然り、彼もまた自分流に結局はこのような異教の哲学者の輩にすぎないのであって、不利な立場に追い込まれると、自分の無定見の言い訳をし、自分が語らなかつたことよりも、むしろ語つたことで私たちを驚かせるのです。ああ、彼もまたソクラテスやセネカのように、あのきれいなよそ行きの服を脱ぎ捨てねばならず、その莊重きわまりない言葉の只中で物笑いの種にならざるを得ないのです。そしてその幅広い才能にもかかわらず、その道徳的存在としての卑小さの故に彼の一派の知性の偏狭さの典型たらざるを得ないのです。しかしながら、こうしたことをすべて認めても、英雄的資質は彼の哲学ではなかつたのです。彼が提唱したことを自らあり余る程に成し遂げたことは私も否定し得ません。彼の哲学は単なる一「手段」でしかないものであって、それによって大

多数の人々の肉体の不快や現世の困窮が、実に効果的に取り除かれるにすぎないのです。そしてすでに、その「手段」が枯渇する気配を示さないうちに、自然の贈り物がきわめて人為的に、贅沢なくらい豊富に、そして多様に、地球の隅々から、この手段によって私たちのもとへともたらされるのであって（そのことは否定できません）、私たちはそれを享受しているのです。

9

それでは、「有用な知識」はその任務を果たし（そのことを私は認めます）、「リベラルな知識」はその任務を果たしていないということなのでしょうか。つまり、それに反対している人たちが考えているように、その直接の目的が、「宗教的な知識」のように人を向上させることがあるとして。私はこのようなことを一瞬たりとも認めるわけにはいきませんし、私がそれを認めない以上、これら反対者の言い分は結局的外れだったこととなります。私は彼らの主張を認めます、というより支持します。「知識」はそれ自体のうちに目的を持っていると考えているからです。リベラルな知識の支持者あるいは敵対者が何と言いましようとも、私はこう主張します。知識に徳とか宗教という重荷を負わせることは、機械的な技術を背負わせるのと同様、明らかな誤りである、と。その直接の務めは、誘惑から魂を守り通すとか、悩める魂を癒やすことではありません。織機を始動させたり車を動かしたりすることでもないのと同様です。どれほど物質及び道徳両面の進歩の手段ないし条件となろうとも、それ自体として考えてみれば、知識は現世の環境を改善することもなければ、私たちの心を繕ってくれることもほとんどありません。そして知識を賛美する人たちが、もしそのような力が知識にあると主張すれば、自分の専攻する学問は詭弁や駆け引きを教えてくれたと主張する経済学者とまさしく同じ類の侵害、自分の専門外の領域への侵害を犯すこととなります。「知識」と徳は別ものです。良識は良心ではありませんし、洗練は謙遜ではありません。同様に広く正しい見解は信仰とは違います。「哲学」は、いかに啓発され深遠であろうとも、激情を抑制したり、何かをさせる動機を与えたりとか、生気を与える原理となることはありません。「リベラルな教育」は「キリスト教徒」でも「カトリック信者」でもなく、紳士を育てるのです。紳士たるもよし、練磨された知性、洗練された趣味、率直・公正かつ冷静な精神、人生に処して高潔かつ礼儀正しい態度を有するもよし、こうしたものが幅広い知識に固有の特質であり、「大学」の目的なのです。私はこれらの特質を擁護し、これより例を挙げてそれを主張していくつもりです。しかし、繰り返しますが、それらは決して高潔さとか誠実さをさえ保証するものではありません。こうしたものは俗人、道楽者、冷血漢にも備わっているでしょうし、そのような人がそれらのもので飾り立てられれば（悲しいことに）愉快的な、魅力的な姿を呈することにもなります。それらの特質を他と切り離してそれ自体として考えれば、何か別のものにしか見えません。それらは遠くから見ると徳のように見えますが、近くで注意深くながめられると、そし

て長い目で見れば、看破されてしまいます。こうして、それらのものは一般にみせかけや偽善として非難されますが、それは、繰り返しますと、何もそれ自体の過ちからではなく、それらを公言し賛美する人たちがその本質を取り違えて譲らず、差し出がましくも何の権利もない賞賛をほしいままにするからなのです。花崗岩を剃刀で切り出し、絹糸で船を繋ぎ止めようとしてごらんなさい。それは人間の知識とか理性といった鋭敏で繊細な道具でもって、情熱とか誇りといった巨人と闘おうとしているようなものです。

確かに私たちは、「リベラルな知識」の価値と尊厳を擁護するために、この種の理論に陥っているわけではありません。また確かにそのような主張の真の拠り所は、それほど微妙でも難解深遠でも、奇妙でも不可能でもないのです。確かに、「人文・教養教育」とはそれ自体を考えれば、知性の練磨にほかならず、その目的が知的卓越以上のものでも以下のもでもないということは一目瞭然ですし、それこそ私がここでお話していることなのです。あらゆるものには程度に高い低い差があるものの、その<sup>パーフェクション</sup>極地があり、そしてあるものの極地は、他のものの極地とは異なります。生命あるものも無生物も、見えるものも見えざるものも、みなそれなりの良さを持っており、それぞれの最良の部分を持っていますが、その最良の部分こそ私たちが追求する対象なのです。人が庭や公園に精を出すのは何故でしょうか？ 皆さんは散歩道や芝生や生垣に、木々に車道に気をお配りになりますが、それは何も果樹園とかとうもろこし畑とか牧草地を造ろうというつもりからではなく、一つの形に寄せ集められ、一つの統一体にまとめられた森や湖、平地や斜面といったもののなかにある美しさにある種特別な美があるからなのです。皆さんの街も、邸宅も、公共の建物も、別荘も、教会も美しいのですが、その美しさはそれを超えた何ものかに通ずるというわけではありません。物質的な美と精神的な美とがあって、容姿の美しさがあると同時に生来の徳性たる精神的存在の美しさがあります。同様に、知性の美しさがあり、知性の極地といったものがあります。これらの様々な主題には一つの理想的極地があって、個々の事例はその極地へ到達しようとし、またいかなるものであれ、それはあらゆる事例の規範となるのです。ギリシアの神々や半神たちは、彫像にかたどられているように、その容姿の均整や広い額や整った顔立ちをしていて、肉体美の極地を表わしています。アレクサンドロス大王とかシザールとか、スキピオ、サラディンといった史上名だたる英雄たちは、人間性の偉大さたるあの雅量や克己の代表者です。キリスト教にも英雄がありますが、彼らは超自然的な階級に置かれていて、「聖者」と呼ばれています。芸術家は容姿や形態の美を、詩人は精神の美を、伝道師は恩寵の美を生み出しますが、繰り返しますと、知性にも美があり、その美を目指す人々もいるのです。精神を開くこと、それを正し洗練すること、知ることができるようにすること、得た知識を消化し、それに精通し、支配し、用いること、精神に諸々の能力、応用力、柔軟性、規律を、批判的的確性、聡明さ、機転、手際よさ、雄弁な表現力を与えること、こうしたものこそ明白な目的（というのは、

私たちはここで「リベラルな教育」の目的がいかなる価値をもつかとか、「教会」がそれをいかに利用するかということではなく、リベラルな教育それ自体を問うているからですが） 私が申し上げたいのは、例えば徳の修養ということと同様明白な目的 ですが、それは同時に徳の修養とは全く異なるものでもあるのです。

## 10

なるほど、これは一時的な目的でしかなく、つかの間の所有物にすぎません。しかし、私たちが重視し追求する他のものも、それ自体はこれと変わらないのです。道徳家は言うでしょう。人間というものはすべての機能において、咲き出せば、しおれる一輪の花〔「ヨブ記」14・2,「詩篇」103・15等〕にすぎず、ある崇高な原理が息を吹き込む限りにおいて、不滅になるのだ、と。肉体と精神は「神の寛大」な御心によって永遠の状態に引き上げられるのですが、欠陥だらけの世界にあってははじめはもう衰えていくばかりです。そして知性の力が衰えれば、肉体の力はそれ以前に衰えていたのであって、たとえば「病院」や「救貧院」が、その目的ははかないものですが、宗教的奉仕を許可されているように、「大学」というものは、たとえ私がこれまで申し上げてきた程度のものでしかないとしても、必ずや同様でありましょう。この世界が減びるべく定められていようとも、この世界を利用することによって私たちは天国へと至るのですから。私たちが自らの本性を完成させるのは、それを損なうことによってではなく、本性にそれ以上のものを付け加え、それ自体の目的よりも高次の目的へと導いていくことによってなのです。

### 原注)

- 1) 『苦難にあえぐ知識の追求』序文。〔ペルファフトのクイーンズ・コレッジの英文学・歴史学教授ジョージ・クレイク(1798-1866)の著書、クレイクは「有用な知識普及協会」の主要メンバー〕
- 2) キケロ「義務について」〔1・6・18〕
- 3) 「芸術は偶然を愛し、偶然は芸術を愛す」。アリストテレス『ニコマコス倫理学』6を参照。
- 4) アリストテレス『弁論術』1・5
- 5) お分かりのように、全体として私は「ペーコン哲学に関するエッセイ」におけるマコーリ卿に賛成である。彼が私に賛成かどうかは知らない。
- 6) 「学問の発達」〔ラテン語版〕4・2。マコーリのエッセイを参照せよ。次の文章も参照のこと。「我々は著作の冒頭において、父なる神、子〔原文、言葉〕、精霊なる神に対して、最も敬虔で熱烈な祈りをささげる。すなわち、人類の困苦と、我々がその僅かでふしあわせな日を送るそうした生のさすらいを思つて、我々の手を通じて新たな賜ものをば、人間の一家に恵み賜わんことを。そしてなおその上に恭々しくこい願わくは、人間のことが神のことに逆らわぬよう、もしくは、感官の諸道を開き自然の光をより増大することによって、神の秘蹟に対する何らかの不信と暗さとが我々の心に生じないように」『大革新、序言』〔桂寿一訳『ノヴム・オルガヌム』所収〕
- 7) フーケの「知られざる患者」

本稿は古典的の大学論の誉れ高い、ジョン・ヘンリー・ニューマンの『大学の理念』(The Idea of a University, Oxford: at the Clarendon Press, 1873; 1976) 第5講演「自己目的としての知識」("Knowledge its Own End") の全訳である。訳注は本文中のカギ括弧内に入れた。